

「義とされて命を得る」

2018年09月15日

ローマの信徒への手紙 5章 18節～21節　そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。

「一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。」一人の人アダムが禁断の木の実を食べて、神の戒めに背いたために、世に罪が入り、人は死ぬべき定めを負う者となった。しかし、神が遣わされた一人の人イエス・キリストの十字架と復活によって、罪が赦され、義なる者とされ、神の命に与って生きる者となった。アダムの罪と死は乗り越えられ、キリストの赦しと義が宣告され、神の命が恵みとして与えられたのである。「一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。」アダムの不従順によって罪人とされたが、イエス・キリストの神への従順によって、全ての人義と認められた。キリストの十字架と復活によって神との和解、救いが実現した。これがパウロの語る福音の核心である。

そこで、ユダヤ人を縛りつけていた律法はどのような意味があるのかという問いが起こる。それに対し、パウロは、「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました」と言う。律法がなければ、罪もない訳で、律法は罪を認識させるものであると言っている。パウロは、フィリピ書 3章 5節、6節で、キリスト信者になる前のファリサイ派時代の自分について、「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」と書いている。神の民であることを誇り、イスラエル人の伝統を継承し、モーセの律法を非のうちどころなく守る者であったと豪語している、しかし今は、律法が入り込んだのは罪が増し加わるためであると、律法の認識が全く違っている。律法を守って、私は義しいと言い張っていたが、赦しを知ったパウロは、律法は守り得ないもので、罪の自覚を生むだけであると言っている。

しかし次に、「しかし、罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」と言っている。罪を知れば知るほど、それを赦してくださる恵みの大きさに心が震えると言っている訳である。マルチン・ルター言葉ではなかったかと思うが、下記のような内容であった。襲い来る苦難の中で、神などいないと、地面に向かってただ呻く。しかし、その呻きは、どんなに整えられた美しい祈りよりも神の御前に届いている。罪に苦しみ悶える者は、神の圧倒的な赦しの中に置かれている。この逆説が福音の本質である。

罪によって死が支配していたが、今や、イエス・キリストの義によって、赦しの恵みが支配し、私たちは永遠の命に導かれている。パウロの信仰は徹底的にイエス・キリストの十字架と復活に集中している。そこに、真の救いがあるからである。